midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム
北相模

October 2014 No.382-383

10月号の１枚：間伐材丸太小屋のためのほぞを彫る

［巻頭言］緑のダム北相模の「経済性創造」の現状

起業創出の種をまいているNPO

活動は来月で１８年目に入る。助成金に頼らずに何とか自力で運営して行きたいと思うのだが、NPO（非営利）なるがゆえに経済性創出は極めて難しい。特に、木がお金にならない現在の林業システムの中で、当会は暗中模索状況にあるが、そんな中に微かな希望の光も見えている。

間伐材を捨ててしまわないで何かにできないか。丸茂会員を代表に「さがみ湖 森・モノつくり研究所」が3年前に発足した。1年目は積み木、森のパズル、2年目は落葉広葉樹ケヤキを使って小学生向きの「学童机天板」制作に挑戦した。すると、タチマチ協力者が現れて「縦40cm×横60cm×幅３cm」の見事な天板が仕上がり、相模原市立新宿小学校へ。納入日には、新聞社5社が取材に来た。好評に付き今年は、緑台小学校との取り組みとなった。昨年同様、作って収めるだけでは「勿体ない」。子供たちの「1泊2日、森林体験学校」は実に楽しかった。

取り付けの日、協力仲間たち10人で天板を取り付けた。子供たちは仕上がった机にしがみついて「気持ちいい、いい香り、勉強するぞ!」と喜んだ。給食は、子供たちと一緒に食べた。帰りには、学校農園で作った立派な「レイシ」を子供たちから貰った。

協働団体の勉強会の講師の話から川田会員・小林会員が「3次元映像解析・森林資源測定」なるものを事業化しようとしている。治田会員が社長になって藤沢に会社を立ち上げた。未だ、苦労の連続だが引き合いが続いていると言う。

また、高井戸中・地球環境部が、何か新しい製品を考えている。ＮＰＯなるが故に、自身の経済性創出は難しいが起業創出の種をまいているようだ。

石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2014.10

10月 5日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上。
持続的森林経営：弁当持参。参加費：４００円
10月19日（第三日曜日）：
相模湖・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動。
主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

FSC
www.fsc.org
FSC® C006376
責任ある森林管理のマーク

[定例活動]小原本陣の森

9月7日（第一日曜日）

夏が去り、秋の足音が着々と聞こえてくる今日この頃、皆様はいかがおすごしでしょうか。

9月7日にForestNova☆の小原定例活動に参加しました。この日の午前中は雨だったため、最初に相模湖駅近くの桂北公民館にて本日の活動についての話し合いから始まりました。雨天時の山での作業には、いろいろな危険が伴うため今回は小原に行くのは断念し、嵐山へ行きチェーンソーの目立てをする班と、そのまま桂北公民館に残り、NPO法人緑のダム北相模についての勉強をする班に分かれました。チェーンソーの目立て班は、製材用の大きいチェーンソーと、普通のチェーンソーの研ぎ方について教わりながら目立てをしていきました。

勉強班では、緑のダム北相模についてと運営会議でどんなことを話しているかということを聞き、それについての勉強を行いました。

天気も回復してきた午後は嵐山にて、午前と同じくチェーンソーの目立て班、倉庫の整理班、嵐山散策ルートの倒木処理班に分かれて作業を行いました。チェーンソーの目立て班は午前中に引き続きチェーンソーの目立てを行い、結果午前と午後合わせて５台のチェーンソーの切れ味が復活しました。倉庫の整理班ではヘルメットの選別、倉庫内の道具の整理を行いました。壊れたヘルメットはモマハウスに移し、倉庫にあるのは壊れていないヘルメットのみになりました。嵐山散策ルートの倒木処理班では、風雨の影響で倒れてしまったミズキとそれに巻き付いていたフジ、それに下敷きになっていたアブラチャンを処理し、通りやすくなりました。

今回は、秋の初めの定例活動であり、しかも雨のあとの活動だったので蜂や転倒などの事故があるのではと懸念していたのですが、そういうこともなく無事故で行えたのでよかったです。まだ、秋は始まったばかりです。これからの定例活動では木々の色づきや虫、キノコなどがこれから、どうなっていくかにも注目して活動していきたいと思います。また、秋は蜂が凶暴になるシーズンですので、それらにも気を付けて無事故で活動していきたいと思います。

櫻井　友樹（Forest Nova）

[定例活動]相模湖嵐山の森

9月21日（第三日曜日）

数日前の予報では天候が危ぶまれたが、何のことはない。夜が明けてみれば、すがすがしく晴れ渡った青空。森林作業にはもってこいの日和となった。高井戸中がテスト期間のため参加は５１名といつもより少なめだが、フォレストノバが早稲田や東京農大の学生を呼びよせたため、若者の割合が圧倒的になっている。そのせいで我々おじさんたちの影がこのところ薄くなりつつあり、へたをすると若者に嵐山をのっとられるのではとの危惧も。しかし、若い人たちにのっとられるならそれもよかろうと、この山に来るおじさんたちはいたって寛容なのである。

さて、今日は東海大附属高輪台高校の久米あずさ先生、高校３年生の古谷優佳さんが初参加。久米先生は生物がご専門で、来る１１月に嵐山で行われる森林環境学習の下見のため、古谷さんは自然が好きで、自然のことを学びたいとの理由から。奇しくも元高輪台高の鈴木先生から紹介されての来訪である。

という訳で、午前中はこのお二人とトレカーサ工事（地元工務店）の藤澤さんを加えた３名の森案内をするのが私の役目となる。生命の森宣言東京の管理する森を抜け、眺めのきく嵐山の肩へ。ここで「せっかくだから天辺まで行きましょう。富士山が見えるかもしれないし」との合意が成立。山頂では残念ながら富士は雲に姿を隠していたものの、眼下の相模湖から遠く南大菩薩までの大きな展望を得ることができ、一同満足。先着していたフォレストノバの森林散策グループと一緒に「はい、チーズ」。

午後。なみすけの森の植生調査に向かう前に森林整備班の作業現場に立ち寄る。久米先生も一緒。「ぜひ写真を撮ってくれ」と石井さんが自慢げにいうだけあって見事な木道が完成しつつあった。これは人が歩く

木道ではなく、以前に木林士（伐採のスペシャリスト）に間伐してもらった材を滑り降ろすためのもの（非写真左、２枚）。「立派ですね。この写真はニュースレターの巻頭になるかも」と、思わず整備班メンバーに期待を持たせる言葉を残してしまったが、さてどうなるやら。（すみません、他の写真になってしまいました。注：編集担当）

なみすけの森では宮村さん、望星高校の佐藤先生たちと合流して植生調査の開始。施業後の下層植生の変化を記録するのが目的だ。急な斜面を歩きながら植物名を逐一記録していった結果、何と９０種以上が確認できた（写真右下）。高井戸中が手を入れる以前は真っ暗で、ろくに草も生えていない荒れ果てた森が今では見違えるよう。植物の復元力もすごいが、森をここまで育てあげた中学生パワーはもっとすごい。改めて感服した次第である。（連載２の写真もぜひご覧ください）

いつもはニュースレターのための取材にまわる私だが、今日は午前、午後とも久々に働いた気分になった（口を動かしていただけですが）。そのため仮り置き場建設に使う柱のほぞ穴づくりやお花畑班の草刈り、ノバの木工作業はほとんど見られず仕舞いになってしまったが、終礼時のメンバーの笑顔は作業の様子をよく物語っている。久米先生、そして午後の木工作業ですっかりノバに溶け込んだ古谷さんの両名からも「また来ていいですか？」のひと言。もちろん。おじさんたちは大歓迎です。

内野　郁夫（本会、理事）

[報告１]
活動参加報告、「緑のダム河口湖」から

一昨年、「生命の森宣言・東京」の佐藤武行会員のお知り合いで、河口湖在住の岩本さんが「生命の森宣言・東京」の森林整備を手伝いに５～６回、お見えになった。その年、１０月に天上山に土地をお持ちの地主さんと一緒に見えて「河口湖でも緑のダムと同じような活動をしたいが名称を〝緑のダム河口湖”として良いか」との事で、「どうぞ・どうぞ」とお仲間になって貰った。

[1]富士急行・終点河口湖駅の旅館街の少し先から林道に入ったほぼ１ha の雑木林斜面が見事に整理されている。ここは、天上山南裾野にあたる。

[2]河口湖から旧鎌倉街道を抜けて甲府に向かう途中の峠から天上山・頂上に向けて林道が入っている。林道終点からは徒歩１０分ほどで天上山展望台に至るが、展望台までの道を岩本さん達は切り開いた。

江戸時代、女性の富士登山は「禁制」だったそうで天上山は、女性は富士山に上る代わりに天上山山頂から富士山を拝んだそうだ。そこからの眺望は、河口湖を眼下に挟んで富士の全貌が見事に俯瞰できる。

今年、１０月初めの夕方、岩本さん達が付けた裏からの林道を抜けて展望台に向かった。無風快晴だったが、富士中腹からうす雲が左手南方に向けてたなびいていた。沈む夕日が雲に徐々に赤く染まって行く姿は、荘厳と言う以外に言いようがない光景となっていた。富士山が信仰の対象となっていた事が納得できた。

「相模湖・嵐山の森」に手伝いに来て下さった時の岩本さんの徹底した働きぶりには、目を見張ったが「緑のダム・河口湖」の森林整備に仕方は、それを彷彿とさせる整然としたものであった。ここの作業は、月一回、１０人程で行っているそうだ。

石村　黄仁（本会、代表理事）

[報告２]
森と人とのつながり

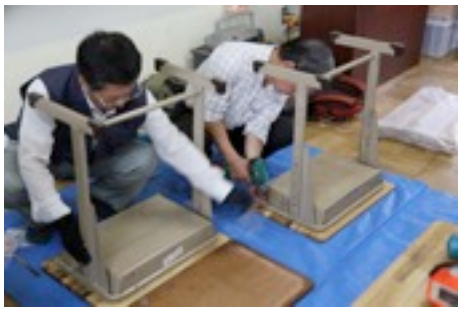
　秋風が肌に心地よい季節となり、草木も衣替えを始めました。
　私たちForestNova☆は、より多くの人に森のよさ、大切さを知ってもらい、感じてもらいたいと思っています。それは、団体理念である「森と人の共助共生社会を目指す」ために必要だと考えているからです。森と人とが共に助け合い、共に生きるためには、まず森に恩返しをしなければならない。恩返しをするには、森を知らなければならない。知るためには森へ行かなければならない。より多くの人に森へ行ってもらうためには、呼ぶことが一番である。来てもらった人に「森」というものを感じてもらい、その感じたことをその人が広めていく。そんな連鎖が続いていけば、いつか団体理念が達成されるのではないかと考えています。
　そのために、私たちは森と人とをつなげていくことを目標とし、「森をつなぐ」という項目を4つの指針の一つにあげ、毎月の定例活動にさまざま人を呼んでいます。大学の友人から、団体同士で知り合った人、知り合いの知り合いや、バイト先の先輩や同僚、親戚など、ありとあらゆるところから森に呼んでいます。それだけでなく、そこからさらに発展し、森に呼んだ知り合いが自分の知り合いを呼んでくれるようになり、さらにさまざまな人が来てくれるようになりました。つながっていく人と人、受け継がれていく森と人、発展していくつながりは、無限の可能性を秘めているかのようです。
　今月の嵐山定例活動では、東京農業大学から三名、森に来てくれました。また、小原に住む中学生になった小林正和くんや、ForestNova☆OBの神宮さんや齋藤さんなど、再び森へ戻って来るかのように懐かしい顔ぶれがありました。小林正和くんはのびのびと自由に木工をしたりお昼寝をしたりと森を堪能。神宮さんには植生調査、齋藤さんにはチェーンソーの扱い方など、貴重なことをたくさん教えていただきました。大学生活や個人の関わりだけでは終わらない、持続性のある活動こそ、目指すべき先なのかもしれません。

　今回の嵐山定例活動を通して、一度だけではなく何度でも、「また行きたい」。そう思えるような活動や体制にしていくことが、これからより一層つながりを深くするために必要なことなのだと改めて感じました。ただ呼ぶだけではなく、森の大切さ、森でしか感じられないものを伝え、深く強いつながりを築いていきたいと思います。

世持　由美子（Forest Nova）

[報告３]
緑台小学校、学習机へ天板を設置しました

　9月10日、 さがみ湖 森・モノつくり研究所では相模原市内の緑台小学校でコナラ集成材の天板を4年1組、2組の机へ交換しました。写真でご紹介します。



[連載１]

緑のダム、リレーエッセイ

「楽しく、休まず、ボチボチな人々」

今月号から、緑のダム北相模で活躍する様々なメンバーをリレーエッセイ形式でご紹介していきます。記念すべき第１回は本会理事で、嵐山の森の活動をとりまとめていただいている内野さんです。

これまでいくつもの山に登ってきました。しかし、いま思うとその山行は頂を極めるというより森に親しむ行為だったといった方がよいのかもしれません。振り返れば、懐かしさとともに同行した仲間との宝のような時間が鮮やかに蘇ります。

そんな森に興味を持つようになったのは四半世紀ほど前のことになるでしょうか。父や友人に誘われ丹沢山塊、南大菩薩の山々を案内してもらったのがきっかけでした。その後、友人たちとはもちろん、ひとりで山に分け入ることも多く、山歩きの楽しさを知り、山への思いを募らせる日々を過ごしてきました。樹木に関心を持ち始めたのもこの頃です。

私の進む方向を決定づけたのはある年の雪深く積もる２月、西丹沢のとある山稜を辿っていた時のことです。小さな獣やヤマドリらしき足跡だけが残る静かな山道。いくつかの起伏を繰り返したのち、それまで険しかった傾斜がいつしか緩くなると、突然目の前にこれまで見たことのない光景が広がっていました。ブナ林です。ブナの木は以前から知ってはいましたが、それが純林となっている姿を見たのは初めてのことでした。

地衣類をまとい優美に立ち上がる灰白色の幹。繊細にかすむ梢には前夜までの雪が降り積もり、それが青空を背景にまぶしく輝いている。全身が震え、この世ならぬ神々しさに思わず心の中で深く手を合わせました。この時、私は森に捉えられたように感じました。森林インストラクターになる少し前のことです。

その後、今日に至るまで各地のブナ林を訪ねてきました。それらは皆、どれも規模や美しさにおいて西丹沢のブナ林をはるかに凌駕していました。しかし、何故かあの時の雪の森ほど私の心が強く揺さぶられたことはありません。

以来、森は私にとって少し大げさにいえば祈り。その懐に抱かれることで豊かさ、安らぎをもたらしてくれるかけがいのない存在となりました。浄土教でいえば阿弥陀如来に当たるでしょうか。「美は永遠に触れている」といった芸術家がいますが、森はまさにその言葉を具現化してくれているように感じます。

内野　郁夫（本会、理事）

[連載２]

相模湖・若者の森づくりから

今月号からもうひとつの連載がはじまりました。相模湖嵐山の森は「里山交流の森」という位置づけで活動しています。都市住民が森での作業を通して、森とふれあい、環境について考えていければと考えています。そのなかで、嵐山定例活動では参加者の半数以上が中学、高校、大学生の若者で占められていることもめずらしくありません。（会では心が若い者を若者と呼ぶことになっていますが）

そこで、その中心的な参加者である大学生のForest Nova、東海大望星高校、杉並区立高井戸中学校とその卒業生たちが森に対してどのように向き合い、森をどのようにとらえているかをこの連載２でご紹介できればと考えています。そしてその中から若者にとっての森づくりの意味、森そのものの新しい価値について考えていければと思っています。

宮村　連理（本会、理事）

【事務局からお知らせ】

小原本陣祭に出展します

　県下で唯一残る本陣(参勤交代で大名が宿泊した宿)という重要な歴史的資源を地域の活性化につなげるとともに、江戸時代の歴史文化を後世に伝えていくために開かれる祭りです。（神奈川県HPより抜粋）このお祭りに、本会、ForestNova、ForestInfo、さがみ湖 森・モノつくり研究所で出展いたします。ぜひお越し下さい。

＜開催概要＞

○平成26年11月3日（月・祝日）
午前10時から午後4時まで
（注）大名行列は午後0時45分から午後2時15分まで

○甲州街道小原宿本陣（相模原市緑区小原698-1）及びその周辺

○公式ホームページ
http://obarahonjin.com/

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食；自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

会員コーナー

●会員のコーナーでは、皆さんの自由なご意見やご提案をお願いいたします。下記の専用メールアドレスか、事務局FAXまでご連絡ください。また、こちらのコーナーへの投稿や写真の提供もお待ちしております。

●通帳からですと振り込み手数料が掛かりません。
　領収書はゆうちょ銀行等の発行する領収書をご利用下さい。
　また、新規入会の方は、住所、電話番号を事務局にお知らせください。
　振込の際は局の振込用紙に記号、番号を記載し、振込者の情報を記入して、機械操作にてお振り込みいただけると助かります。

世田谷郵便局　（記号）10000-（番号）65791651

NPO法人
緑のダム北相模

急がず、無理せず、楽しく、休まず、
ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１６年間、
一日も休まず“継続は力”。）

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局 Tel&Fax　03－3411－1636
ＵＲＬ：http//www.midorinodam.jp
E-mail：info●midorinodam.jp　●を＠に変更して使用してください
corner●midorinodam.jp　会員コーナー専用アドレス

協働団体：セブン-イレブン記念財団、相模原市（市民協働推進課）、東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
支援団体：WWF JAPAN、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、JFEメカニカル、東急コミュニティ、マルモ出版